バイオ・ハザード

新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バイオ・ハザード

【Ｎコード】
Ｎ２５８２Ｃ

【作者名】
新人

【あらすじ】
すべてが始まったラクーンシティでまた事件が起こる。

キャラ紹介（前書き）

多少グロテスクな表現が含まれます。
これを不快に思う方はご覧にならないでください。
皆様のご理解をいただければありがたいです。

キャラ紹介

キャラ紹介

レオン・S（スコット）・ケネディ

6年前ラクーンシティの警察に配属された直後「アンブレラ事件」に巻き込まれる。
しかし、その死の町から生還。その腕前を買われ、特務機関にスカウトされた。
そして、「アンブレラ事件」から6年後大統領の娘がさらわれ、極秘で調査し、
ヨーロッパの村にたどり着き、寄生虫（プラーガ）に取り付かれた村人や
化け物を相手にし主犯格のオズムンド・サドラーとの死闘を繰り広げ無事生還。

アシュリー・グラハム

アメリカ合衆国大統領の娘。学校の帰り道何者かに襲われ消息を絶った。
そして監禁されていた所をレオンに助けられる。少々ワガママ・・・

エイダ・ウォン

年齢、出身、目的などすべてが謎に包まれた、東洋系美女。
「アンブレラ事件」でレオンに恋心を抱いたものの途中で負った傷がもとで命を落としたかに見えた。アシュリー捜査任務でレオンをサポートなどをしてくれた。
「エイダ・ウォン」とは6年前レオンに名乗った仮の名前。本名は

不明。
今は「第3の組織」の諜報員として活動している。
「第3の組織」については全くわかっていない。

イングリット・ハニガン

レオンの補佐役として活動。合衆国特務機関のサポート要員で、アメリカから
無線を通じてレオンを援護する。

ジャック・クラウザー

レオンのもと相棒で2年前に事故で死んだはずだったが、レオンの前に姿を現す。
オズムンド・サドラーの元に仕える一方で「第3の組織」と連絡を取り合っていた。

アルバード・ウェスカー

エイダたちが所属する「第3の組織」にて彼らを動かしているのが、この男だ。
「アンブレラ」の再興をたくらんでいる。

オズムンド・サドラー

宗教団体ロス・イルミナドス教団のカリスマ。アメリカを従えようとしていた。
オリジナルキャラクター

カース

今回の話で同行することになった。
アメリカの特殊部隊のリーダーで、ムードを盛り上げてくれる。

？？？？？？？？

第３の組織の裏切り者。名前は明かされる予定はない。

キャラ紹介（後書き）

感想などどしどし書いてください。話がわからない・・・と言う人もいたら書いてください。

プロローグ（前書き）

この作品の会話部分にはレ、大、ハなどがありますがこれは、レオン・S・ケネディのレ
大統領の大、イングリッド・ハニガンのハです。

プロローグ

コツコツコツ・・・とんとん
「入ります、大統領」
「レオンか入りたまえ」
ガチャ・・・ばたん
レ「急に呼び出して用とは何ですか」
大「実は、ここ最近ラクーンシティが完全に復興したのだ。」
レ「ラクーン・・・」
そうつぶやくレオンの脳裏にはあの悪夢のような光景を思い出していた。
大「そこに特殊部隊を送ったが、連絡が途絶えた」
少し間をおき、
大「レオン・・・ラクーンシティを調べてほしい」
レ「わかりました」
大「・・・・そうか。今すぐいけるのか？」
レ「いつでも」
大「では今すぐ行って貰う。すでにヘリの手配はしてある」
そしてレオンは部屋を出た。すべての装備はそろえ、レオンはラクーンをめざしヘリに乗った。
一時間はたったのだろうか。レオンはラクーンの近くに降りた。
ヘリは帰っていった。レオンはラクーンへ歩いていった。
いまだ残るあの忌々しい記憶と恐怖をかき消しつつ一歩一歩歩いていった。
ラクーンの入り口にたどり着いた。そのとき無線が鳴った。
ハ「今回の任務でもまた一緒になったわね。よろしく」
レ「ああ。」
ハ「早速だけどレオン。こちらの捜査でラクーン復活の件で裏で糸を引いているやつがわかったの。場所・・・クーンの・・・・ザー

ーーーーーー」
電波障害が起こっているのか連絡が途絶えた。
レ「情報なしか。なけるぜ」
レオンはラクーンに足を踏み入れた。あたりは太陽が沈みかかっていた。

プロローグ（後書き）

次の更新は、今月中にはしあげたいと・・・

悪夢の始まり

ラクーンに入ってくる侵入者を上から見ているものがいた。
「・・・レオン・・S・・・ケネディ」
そのこえは怒りがこめられていた。
レ「人の生気が感じられない。人がいるのか？」
そのとき後ろで何かの気配を感じ振り向いた。
レ「気のせいか？」
レオンはさきえ進むことにした。レオンが行く当てはなかった。情報がないからだ。
レオンは途方にくれた。
レ「ふぅ・・・。どこに行けって言うんだ・・・・・・・・警察署・・・」
レオンはこうつぶやき、警察署を目指した。
ラクーンはまるで何事もなかったかのように静まり返っていた。
今までのようにゾンビや寄生虫に取り付かれた人（ガナード）も出ずあっさりと警察署についた。ただし場所だけだ。そこには警察署はなく、別の建物が建っていた。
レ「クソっ！手がかりがなくなった」
とレオンは考え込んだ。そのとき
ピピッザ・・・ザーーと無線がなった。
レ「こちらレオン」
ハ「レ・ンこ・ら、ハニ・・。・・ブレラのし・つは、ラクーン・ちゅうしん・
ある・・いわ。す・にむかっ・・・ザーーーーーーーーーーー」
レ「ハニガン！！・・・クソまだうまくつながらない」
レ「ラクーンの・・・中心」
そうつぶやくとレオンは歩き出した。しばらく歩くと妙な気配がレオンを追ってきているように感じた。レオンは立ち止まりハンドガ

ンを抜いた。
レ「また、悪夢が始まる」
「オ゛ア゛ーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

始まる戦い（前書き）

ちょっと更新遅れました。
すいません。

始まる戦い

レオンは見た。
町を徘徊する化け物の群れを。
それは何十匹もいた。
だが、今までのゾンビとは何かが違った。
レ「うそだろ」
レオンは銃を構えた。
パーン・・カランカラン・・・
先頭にいた化け物は頭を撃ち抜かれ、血が当たりに飛び散った。
そいつは後ろにのけぞったが、体勢を立て直してこちらに向かってきた。
バーン・・バーン
続けざまに2発撃った。ゾンビは倒れ動かなくなった。
しかし、安心している暇はなかった。次から次へとゾンビは襲ってきた。
レ「しつこいな」
そういうと、レオンはポーチから手榴弾を取った。
レ「これでも食らってろ」
レオンはピンと金属の棒を抜くと、手榴弾を投げた。そしてレオンは伏せた。
ドーーーーー・・・ン・・・・・・
あたりには煙とゾンビの肉片が転がっていた。
もうゾンビはいないようだ。
レオンは立ち上がり再び目的地に向かって歩き出した。
レオンのハンドガンの弾数は１６発。使った弾は3発。
残り１３発。
もちろんレオンはハンドガンだけでのこのこ来たわけじゃない。
別の装備もしてある。今は伏せておこう。

しばらく歩いたレオンは急に立ち止まった。
レ「なんてこった。」
そこは、破損したバスや車がたくさん転がっていた。
もちろんそこに敵がいないわけじゃない。
破損した車やバスから血だらけのゾンビが転がり出てきた。
レ「くっここは通れないな。ほかを行くか」
レオンは右にあった通路に向かった。
しばらく歩くと見覚えのある服装をした死体が転がっていた。
もちろんそいつはゾンビになるところだがならなかった。
なぜなら、頭がないからだ。倒れている首には頭から食いちぎられたあとがあり、
頭は転がっていなかった。ただ、脳みその一部が地面にくっついたが・・・
レ「こいつは、特殊部隊のやつか。やはり殺されていたか」
ふと、レオンは死体の手元を見た。その死体は
サブマシンガンを手にしていた。ありがたいことにまだマガジンにはたくさん弾があった。死体はうつぶせになっていて
レオンはそれを仰向けにした。
そしてポケットなどを探し、ハンドガンの弾、３０発
サブマシンガンの弾１００発、それと、ハンドガンブラックテイルを頂戴した。
レ「こいつはラッキーだったな」
ヴヴヴヴヴヴ・・・
レオンは異様な気配を察知し、ハンドガンブラックテイルを抜いた。
レ「こいつの頭を食らったやつの顔を拝見できるな」
そしてそいつは飛びかかってきた。

始まる戦い（後書き）

次はいよいよ謎の化け物と対決です。

再会（前書き）

ハンドガンはたくさん出ます。
ハンドガンブラックテイルはブラックテイル
ハンドガンはそのまま
ハンドガンレッド９はレッド９です

再会

そいつは異様な姿をしていた。
頭が2つあり、つめが異様に長く、尻尾は鋭い凶器のように光っていた。
そいつは鋭いつめで襲い掛かってきた。
レオンはそれをよけた・・・次の瞬間、尻尾の凶器がレオンの腹に深々と刺さった。
レ「あぐ、、、う」
レオンの腹からは大量の血が飛び散った。
レ「クソっ・・はぁはぁ」
それでもレオンは立ち上がった。ブラックテイルの赤いライトの標準をそいつに合わせた。
ブラックテイルは連射速度も速く威力も強い。3発撃った。弾はすべてそいつに命中した。
弾は、頭、胴体、足に命中した。
そいつはよろけた、だが体勢を立て直した。
レ「まだやるのか」
レオンはサブマシンガンを手にした。
サブマシンガンから放たれた弾はそいつの体を貫いていく。
そしてマガジンは空になった。と同時に
そいつは動かなくなった。
レオンは空のマガジンを捨てると弾をマガジンにつめた。
サブマシンガンの装弾数は60発。
しかし、改造されていたため威力は強力だった。
レ「ぐっ」
レオンは倒れこんだ。腹から血が流れ出る。
レオンは誰もいないことを確認し、近くにあったコンテナに入りふたを閉めた。それから持っていた包帯を腹に巻いた。

レオンは眠りについた。

○

朝になった。レオンは目を覚ました。痛みはほとんどなくなっていた。
レオンはふたを開けた。誰もいなかった。レオンは降りた。
外は、まぶしい太陽が照らしつけていた。
レ「いい天気だな」
明るいうちはゾンビは出ないのか、とレオンは心の中で言った。
レオンは歩き出した。しばらく行くと広場に出た。
その中心には怪しいよろいがたっていた。
レオンが横を通ろうとしたそのとき、
ア゛ーウ
とゾンビの声がしてよろいが倒れた。レオンは後ろにとび、戦闘態勢に入った。
ガチャガチャよろいは立ち上がりこちらに向かってきた。
ハンドガンを撃った。弾はよろいに当たったが
ガキーンと音がし全く効かなかった。
レ「ならこれだ」
ハンドガンの標準を頭にあわせ撃った。
頭のよろいが吹っ飛んだ。ゾンビはまぶしい日光に照らされ倒れた。
レ「弱点は太陽か？」
レオンは先へ急いだ。途中武器屋があった。
レ「弾を探すか」
レオンは扉をけり中へ入った。人影があった。
レオンは銃を向けた。
「ま、まって。撃たないで」
レオンは銃をしまった。
レ「すまない。君のなま・・えは」

レ「アシュリー？」
ア「レオン！」
アシュリーはレオンに抱きついてきた。
レオンは引き離した。
レ「大統領の娘の君がなぜここにいるんだ」
と静かに聞いた。
ア「友達と一緒に来たの」
レ「大学の？」
ア「うん。休みに入ったから旅行に来たの。でも本当はここに旅行に来るはずじゃなかったの。
電車に乗っていたらこの町の近くの駅で急に電車が止まったの。
でこの町が見えたからここにきたの」
レ「友達は？」
ア「・・・・・」
レ「どうした？」
ア「変な化け物に襲われて・・・怖くて逃げてきたの」
レ「そうか・・・ちょっと待っててくれ」
そういうと店の武器を探し始めた。
レオンはショーケースを見つけ、それを素手で割った。
ガシャーンとガラスが飛び散った。
そこにはマグナムが在った。
レ「助かった」
あたりにはたくさんの弾が転がっていた。そこで得た武器、弾は
ショットガン
手榴弾３個
ハンドガンレッド９
ショットガンの弾１０発×４個
ハンドガンの弾２０発×５個
マグナムの弾１０発×４個
だった。

なかなか品揃えがいい店だった。
レ「かなりの装備が手に入った。もうここに用はない。いこうアシュリー」
ア「うん」
レオンとアシュリーは店を後にした。

再会（後書き）

偶然にもほどがあるけど
ご了承ください。

新たな敵（前書き）

ふう。つかれたー。

新たな敵

店を出るとあたりは薄暗くなっていた。
レ「気をつけろ。ゾンビが出たら教えてくれ」
アシュリーはうなずいた。
途中錠前がかかった扉があった。レオンはナイフを取り出すと力いっぱい
振り下ろした。高い音がして錠前は落ちた。
ア「相変わらず野蛮ね」
アシュリーがつぶやいた。扉を開けると、機械音が聞こえてきた。
ヴォンヴォンヴォンヴィーーーン
チェンソーの音だ。
レ「アシュリー気をつけろこの先に何かがいる」
少し進みレオンは見た。
通常のゾンビとは異なるゾンビを。
そいつはチェンソーを持っていると言うよりもゾンビとチェンソーが
融合している感じだった。
レ「化け物め・・アシュリー下がってろ」
レオンはブラックテイルを抜いた。
そのゾンビは移動速度は通常のゾンビと同じだった。
レオンはブラックテイルの引き金を引いた。
４発撃った。鈍い音がして血が飛び散る。
しかし、何もされてないかのようにこちらに向かってくる。
レ「クソ」
チェンソーゾンビはチェンソーを振り下ろした。
レオンはそれをよけまわし蹴りを食らわせ吹き飛ばした。
チェンソーゾンビは壁に激突した。
レオンはブラックテイルで撃った。
３発はすべて頭に当てた。そいつは動かなくなった。

その瞬間、目の前が真っ白になった。
ドーーーーーーーー・・・ン
レオンとアシュリーは吹っ飛ばされた。
レ「くそ。爆発したのか。アシュリー、立てるか？」
ア「何とかね」
あたりは火に包まれ、煙りが出ていた。
レ「音を聞きつけてやつらが来るかもしれない。早く行こう」
進んでいると音を聞きつけたゾンビがこっちにきた。
レオンはショットガンでゾンビどもを吹っ飛ばした。
ゾンビどもはドミノ倒しになった。
レ「いまだ」
レオンはゾンビが倒れている隙に通り抜けた。
ところがレオンはゾンビに足をつかまれた。
レ「クソッ」
レオンはハンドガンをゾンビに撃った。ゾンビは手をはなした。
そしてレオンはついにラクーンの中心にたどり着いた。しかしそこには何もなかった。
レ「ここが中心のはずだ」
ア「レオン！これみて」
アシュリーが指を差した先にはくぼみのある床があった。
レ「なるほどこれに何かをはめればいいのか」
レオンがつぶやくとアシュリーが自分のポケットに手をいれ、レオンに見せた。
それは、石でできていてライオンが描かれていた。
レ「これをどこで？」
ア「さっきチェンソー持ったやつが落としたの」
レ「でかした。アシュリー」
アシュリーからその石版のようなものを受け取りはめた。
すると床の一部が動き、隠し階段が現れた。
レ「いくぞ」

レオンとアシュリーは階段を下りた。

新たな敵（後書き）

連続更新完了。次話夜露死苦。

出会い（前書き）

あとがきをお読みください。
キャラ紹介に出てないキャラが出たので
プロフィールを書きます。

出会い

地下は薄暗く不気味だった。レオンはハンドガンにライトを取り付けあたりを照らした。
アシュリーには懐中電灯を持たせた。
ア「すごいにおい。頭がおかしくなりそう」
そこは異臭が漂っていた。
レ「当たり前だ。地下だぞ」
そこは下水道が近くにある。異臭はそこからだろう。
レ「ここは敵がいるのか」
そのときだった。
「おーい。助けてくれー」
ア「人の声だわ。行きましょう」
レ「あぁ」
レオンとアシュリーは声が聞こえるほうに走った。
そこには、アメリカの特殊部隊の人がいた。
「助かったよ。ありがとう」
レ「助けたわけじゃない」
と、レオンは皮肉に言った。
「そういわないでくれ」
ア「あなた名前は？」
「へ？あんたはアシュリー？」
ア「そうだけど？それより質問に答えて」
と強く言った。
「あぁ。俺の名前は、カースだ。よろしく」
レ「レオン・S・ケネディだ。」
といって握手した。
カ「あんたは確か特務機関のエージェントの？」
レ「あぁ。そうだ」

レ「それよりお前の装備は？」
カースは手に持っているサブマシンガンを見せた。
カ「俺のはサブマシンガン２丁とその弾３００発とハンドガン２丁と弾２０発が５個か」
といった。整理すると
サブマシンガン×２
サブマシンガンの弾３００発
ハンドガン×２
ハンドガンの弾２０発×５個
レ「なかなかいい装備してるじゃないか」
カ「へっ。まあな。それと俺は武器に詳しくてな。武器の改造もしてる。
どうだ仲間にしてくれ」
レ「よし。わかった。お前はアシュリー保護及び戦闘サポートだ」
カ「わかった」
ア「ちょっと。信用していいの？」
と小声で言った。
レ「悪いやつじゃなさそうだ」
レオンはカースのほうを向いた。
レ「地図は？」
カ「あるぜ。」
といって小型の機械を取り出した。その液晶画面にはこの町の地図、この謎の施設の地図が載っていた。
カ「外でここの研究員のゾンビと戦って、そいつから頂戴したのさ」
と自慢げに言った。
レ「聞いていない」
レオンは冷たく言い放った。
カ「ついでにそれには生存者つまりゾンビじゃないやつとゾンビがマークで現れる。
赤い○がゾンビ、青い○は生存者だ。地上を見てみろ。赤い○だら

けだ」
と指差した。確かに赤い丸が画面を埋め尽くしていた。
カ「おっといい忘れた。そいつは隠しカメラとも電波でつながっているから
隠しカメラに映っているものも見れるぜ」
レ「説明どうも」
と言って、ポケットにしまった。
さっきの地図ではまだまだ研究施設は先らしいな。
カ「絶対生き残ろうな」
レ「あぁ。当たり前だ」
レオンたちは歩き始めた。
・・・・３０分は経過しただろうか。
ようやく電気がついているトンネルに入った。
ア「ねぇちょっと休もうよ。もう疲れたしおなかすいた」
レ「そうだな少し休むか。ここならゾンビも来ないだろう」
といって３人は地面に腰掛けた。
カ「食料はあるぞ」
といって携帯用の缶詰、パン、水、チョコレート、ガム、キャンディー、キャラメルを
取り出した。
レ「ずいぶんあるな」
と、レオンは感心した。そして３人とも食べ始めた。
１０分後・・・
レ「腹ごしらえと休憩は済んだか」
カ「タバコ吸うか？」
レ「いや、いい。お前もやめておけ。走るときに肺が苦しくなるぞ」
カースはいやそうな顔をしたがタバコをしまった。
レ「よし。行こう」

出会い（後書き）

カース
地下トンネルでレオンたちが出会う仲間。
ラクーンに送られた特殊部隊の一人。
アシュリー保護と戦闘サポート、武器改造担当。

エレベーター（前書き）

特になしです

エレベーター

ここはラクーン研究施設の一室。
「レオンが来たそうだな」
「えぇ、地下トンネルにね」
「今回はあの男からはいつもと違う任務を任された。俺もお前も」
「じゃあ、その任務を全うするだけよ」
「お前はレオンが好きだからな」
「そうかしら？また会いましょ」
コツコツコツ・・・
「全く。読めない女だ」

○

レオンたちは自分たちの身長の何倍もある扉の前に立っていた。
しかしその扉は押しても引いてもスライドさせてもあかなかった。
レ「仕方ない。最後の手段だ。みんな下がってくれ」
と皆を下がらせてどこからかロケットランチャーを取り出した。
カ「お前、それどこで？」
レ「どこでもいいだろ。撃つぞ」
次の瞬間ロケットランチャーは火を吹いた。
大きい爆音と同時に砕け散った扉の破片、けむりが出て、
耳をふさぐ、頭を抑えるので大変だった。
カースは鼻を押さえていた。
大きい破片が顔面に直撃したらしい。
レ「大丈夫か」
ア「大丈夫なわけないでしょ。レディのまえでそんな危ないもの使わないでよ」
カ「その様子じゃ元気だな」
アシュリーとカースは扉を見た。

見事に穴が開いている。
レ「行くぞ」
レオンはロケットランチャーを投げ捨てた。そして
大きな部屋に足を踏み込んだ。
ア「でっかーい」
レオンはモバイルを取り出した。
レ「ここには数体のゾンビがいるな」
目の前には機材を運ぶためと思われるでかいエレベーターがあった。
レ「乗るしかなさそうだな」
ア「でも、なーんか怪しいよね」
カ「罠かもな」
レ「行くぞ。ここでとまっててもいい意味がない」
3人はエレベーターに乗った。
ウィーーーン・・・ガタガタガタガタ・・・プーーー・・・ン
レ「何だ？エレベーターが止まった」
そのときエレベーターが大きく揺れた。
カ「やっぱりお出ましのようだな」
レ「構えろ！」
目の前には普通ではありえない生物がいた。
レ「また化け物か」
超巨大なありがいたのだ。
カ「これでも食らってろ」
カースはサブマシンガンの引き金を引いた。
弾はありの頭部に命中した。ありから緑の血が噴出した。
ありは転落していった。
カ「終わったか？」
レオンは下を覗いた
レ「いや、まだだ！」
ありは再びエレベーターにちかずいてきた。そしてありはエレベーターに

突進してきた。
カ「うわっ」
ア「危ない」
レ「アシュリー何かにつかまっていろ」
カ「策があるのか？」
レ「こいつがある」
とレオンは武器を取り出した。
カ「そいつは・・・マインスロアーじゃねぇか！そいつは珍しいな。
爆弾を打ち出す変則銃だ」
レオンは引き金を引いた。マインスロアーから放たれた弾はありの
頭部に
くっついた。
ピッピッピッピッ・・・
そのあと大きい爆音が響いた。ありの頭部はなくなっており体は下
に落ちていった。
カ「ヒュー。お見事、何でそれを持ってたんだ？」
レ「前にちょっとな」
カースはサブマシンガンの空のマガジンを捨て別のマガジンに弾を
つめ、
サブマシンガンに入れた。
ア「それより、どうやって止まったエレベーターを動かすの？」
全員考え込んでしまった。
レ「見ろ。あそこにエレベーターを降りるとこがある」
ア「だからどうやって・・・」
レオンはハンドガンを取り出した。
レ「こうするのさ」
レオンが引き金を引いた。すると、フックがついたロープが飛び出
た。
カ「フックショットか」
レオンはそこにフックがかかったのを確認するとうえに上がってい

った。
レ「カース今フックショットを投げる。キャッチしてくれ」
カ「ＯＫ」
レオンはフックショットを投げた。カースは見事にキャッチした。
カ「よし。とったぞ」
カ「アシュリー先に行くんだ」
カースはフックショットを撃つとアシュリーに持たせた。
レオンがアシュリーを持ち上げた。
レ「投げるぞ」
カ「あぁ」
そしてカースが来た。
レ「よし行くぞ」
レオンは扉を開けた。

エレベーター（後書き）

レオンはほんとどこから武器を出してるんだか。
謎が多いです。

休憩（前書き）

つかれたー

休憩

コツコツコツコツ・・・
「レオンたちはエレベーターのありを殺したようだ」
「あら、またあなた？ずいぶん忙しいようね」
「ふん。おれたちはいつ出撃するんだ」
「まだ、もうちょっとよ」
「何を考えてる」
「さぁね」
「じゃあこっちが聞くわ。なぜ生きていたの。
あの時、死んだと思ったけど」
「さぁな」
「これでおあいこよ。じゃぁね」
コツコツコツ・・・
「本当に読めないやつだ」

○

レ「この部屋はゾンビだらけだな」
カ「パーティでもしてたのか？」
レ「どうやらそのパーティのメインは俺たちを食らうことらしい」
カ「だろうな」
レ「いくぞ」
レオンとカースはサブマシンガンを乱射した。
カ「オラオラオラー」
２人のサブマシンガンの攻撃でゾンビどもはただの肉片になっていった。
その部屋にはレオンたち以外に動くものはいなくなった。
床や壁は血まみれになっていた。
ア「うぇっ・・・」

レ「大丈夫か。アシュリー」
ア「ごめん。気持ち悪くなっちゃって」
カ「女の子には刺激が強かったのか」
レ「はやく先に行こう」
カ「ちょっと待て」
カースは血だらけのとこに近ずくと、あさりまくった。
カ「武器ＧＥＴ～」
レ「なにをだ？」
カ「整理するから待て」
マグナムキラー７
マグナムの弾５個×４
サブマシンガンの弾１００発×５
ハンドガンの弾１０発
レ「いったい誰に見せてるんだ」
ア「早く行って」
レオンたちはその部屋を後にした。
レ「ここの部屋は頑丈そうだな。今日はここに泊まるか」
カ「まぁいいけど・・・危なくないのか」
レ「頑丈そうな扉だ。ちゃんとロックした。ゾンビは来ないだろう」
カ「交代で見張りをしよう。それなら安全だ」
ア「私はそれでいいけど」
レ「よし。決まりだ」
カースは辺りを物色していた。
カ「ん？・・おい！みろ食料がこんなに。それと飲料水もあと工具もある。」
レ「よし。腹ごしらえをするか。工具はどうするんだ？」
カ「武器を改造してやるよ。何でもいいから武器を貸せ」
レオンはハンドガンを出した。
レ「ほら」
カ「腕が鳴るぜー」

カースは早速作業に取り掛かった
レ「アシュリー。飯は・・」
ア「おいしいよ。レオン」
レオンはやれやれという顔をした。
食べ終えたアシュリーはすぐ眠ってしまった。
レ「カース。俺も寝るぞ」
カ「あぁ。改造は任せろ」

○

レオンは目を覚ました。アシュリーはまだ寝ていた。
カースも寝ていた。レオンの枕元には改造されたハンドガン、ショットガン、マグナム
ブラックテイル、レッド9、サブマシンガンがおいてあった。
ハンドガンだけじゃ物足りずに勝手にレオンの武器を取り改造したのだろう。
そのときアシュリーが目を覚ました。
そのときアシュリーが足を伸ばしたため、カースは顔をけられ最悪な起き方をしてしまった。
カ「いてー。顔をけるな。か・お・を」
相当痛かったのだろう。
レ「カース。どこを改造したんだ?
カ「あ?あぁ今説明する」
ハンドガン・・・マチルダになった。装弾数１００発・連射性能　高
３点バースト射撃が可能　威力　高
マグナム・・・装弾数６から１２にＵＰ。威力　高　連射性能　中
ショットガン・・・セミオートになった。装弾数１００発。威力　高
連射性能　低　攻撃範囲　広
ブラックテイル・・・威力　中　装弾数３５発　連射性能　高
レッド９・・・ストックがついた威力　中　装弾数２２発　連射性能　中

てぶれが減った。
サブマシンガン・・・威力　高　装弾数１５０発　連射性能　高

カ「ってところか」
レ「・・・すごいな」
ア「・・・・・・・」
アシュリーは何がなんだかわからなかった」
ア「まっいっか」
レ「休憩も済んだ。行くか」

休憩（後書き）

詳しく書いてたらつかれた。

大群（前書き）

つかれたーしかいうことはない！！

大群

「あのカースって言うやつすごいな」
「武器の改造をあの短時間ですごいわね」
「だがもうすこしで奴のところにつく」
「そこでピンチになったら行きましょ」
「ふん」

○

扉の先は一本道だった。
全員が入ったとき扉が閉まった。
そしてその先のドアが開き、かなりの数のゾンビが入ってきた。
カ「いきなりかよおい」
カースはサブマシンガンを構えた。
レオンもサブマシンガンを構えた。
レ「アシュリーはここで待機してろ」
カ「いくぜ」
カースのサブマシンガンが火を吹いた。
それに続くようにレオンも引き金を引いた。
先頭のゾンビが蜂の巣になり、あたりに血が飛びちる。
その後ろの敵にも弾が貫通していて、後ろのゾンビも蜂の巣になっていた。
しかし、ゾンビは続々と出現してきた。
マガジンを交換しながらいった。
レ「こいつらは研究員らしい。ここでウイルスが流出したんだろう」
カ「そうだな。それよりサブマシンガンはもうやめておこう。
後々必要になるかもしれない。弾も落ちているかわからんからな」
レ「わかった」
レオンはマチルダに持ち替えた。

カースはハンドガンパニッシャーの持ち替えた。
パニッシャー・・・威力　低　連射性能　中　装弾数２８発
特殊能力　貫通性能　高
カ「こいつは威力は弱いが」
といって一発撃った
カ「貫通能力が高い」
先頭のゾンビとあとのゾンビ４体に貫通していた。
カ「足どめには最適だ」
レオンはレッド９の引き金を引いた。レオンの射撃は正確で、すべて頭を打ち抜いていた。
一体ゾンビを殺すと、大量の血が流れ出るためあたりは血の海になったいた。
レオンはマガジンを捨て新しいマガジンをつめた。
レ「いつになったら終わるんだ」
カ「さぁな」
ア「みんながんばって」
カ「おう」
レオンはレッド９をしまい、マチルダを出した。
そして引き金を引いた。
マチルダから発射される弾は３発連続発射だ。
サブマシンガンには負けるが・・・
３０分は経っただろうか。
ついにレオンとカースＶＳゾンビの大群の戦いに終止符を打った。
ゾンビの出現は止まった。
レ「はぁ、はぁ、はぁ」
カ「おわったな」
レ「弾は？」
カ「まだまだたっぷりある」
レ「そうか」
そのとき頭上から声が降ってきた。

『君たちはなかなか死なないな。さっさと死ねばいいものを』
レ「誰だ。お前は」
『まぁこれで楽しみが増えた。せいぜいもがくがいい。もがいたところで逃げることはできない。じっくり見学するとしよう。ハッハッハッハ』
カ「クソ。ふざけやがって」
レ「先に進もう」
レオンたちはゾンビの大群が来たほうへ向かった。
その際、ゾンビ共の血が歩くときベチャベチャ靴にくっついてアシュリーが気味悪がってレオンにおんぶしてもらった始末だ。
ア「ごめんね、レオン」
レ「ここは何の研究施設だ」
その部屋は緑色の液体が入ったカプセルがたくさんあった。
研究施設のおなじみパターンである。
カ「さていくかぁ」
と進もうとしたのをレオンが止めた。
レ「まて。何かいるぞ」
レオンはブラックテイルを抜いた。
カ「マジかよ」
カースはキラー7（マグナム）を抜いた。
レ「アシュリー隠れてろ」
ア「うん」
アシュリーは近くにあった研究機材の隅に隠れた。
そして天井から何かが降ってきた。
落ちたあたりはひびが入り煙が出ていた。
そこには、黒いスーツを着込んだ青い顔の生物が立っていた。
そいつはゾンビというより人間に限りなく近かった。
レ「タイラント・・・」
カ「知っているのか奴を」
レ「ああ。対ゾンビ用人体実験生物兵器ってところか」

カ「くるぞ」
タイラントはいきなり襲い掛かってきた

○

「タイラントとぶつかったか」
「避けられないわね」
「狙った獲物は絶対逃がさない」
「冷酷殺人鬼タイラント」
「今度こそ行くか」
「どうかしら」
「じやあ見てるのか」
「あなた昔なじみの仲間だから、そんなに心配なのね」
「なに。じゃあお前はどうなんだ。まだ好きなんだろ」
「さぁね」
「女心はわからん」
・・・・・

大群（後書き）

次回あいつらの登場です。

タイラント（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

タイラント

レオンはタイラントの突撃をよけ回し蹴りを食らわせた。
ところが逆に足をつかまれ投げ飛ばされ、レオンは壁に激突した。
レ「グッ・・・」
レオンは吐血した。と同時に腹の古傷も開き、血が出た。
カ「レオン！！・・クソッ」
カースはサブマシンガンでタイラントを撃った。
しかし、タイラントは弾をものともせず突っ込んできた。
カースはタイラントの回し蹴りを食らい吹き飛ばされ、壁に激突した。
カ「グアッ・・・」
レオンは壁に寄りかかりながらも立ち上がった。
レオンの手はマグナムを握っていた。
レオンはタイラントにマグナムの弾を食らわせた。
タイラントはレオンのほうに走ってきた。
タイラントは、右腕を引きパンチを放った。
レオンはそれをぎりぎりでかわした。
タイラントが放ったパンチは壁に当たり、壁が粉々に砕け散りおおきな風穴が開いた。
カ「バカ力(ぢから)め」
カ「ん？あれは」
カースは見た。レオンが撃った弾はタイラントにダメージを与えていた。
カースはキラー7を構えた。そしてタイラントの傷口を撃った。
見事に命中した。
カ「よし」
タイラントはよろけた。
いまだ！！レオンはサブマシンガンをタイラントの足に命中させた。

そしてタイラントを転倒させた。
レ「総攻撃だ」
２人のサブマシンガンはタイラントに的確に当たっていく。
カチッカチッ
弾切れだ。その隙にタイラントは立ち上がり、自分があけた壁の穴へと姿を消した。
レ「はぁはぁはぁはぁ・・・逃げやがった」
カ「くそっ・・・はぁはぁはぁ」
ア「２人とも無事？」
レ&カ「なんとかな」
ア「よかった」
カ「弾を捜すぞ。みんな。」
レ「あったぞ」
カ「こっちもだ」
ア「あたしも見っけた」
カ「持ってきてくれ。・・・どれどれ」
小型ハンドガン×５　研究員のゾンビの死体のポッケから頂戴した
マシンピストル×２
〃の弾１００発×５
マグナムの弾５発×５
ハンドガンの弾１０発×５
サブマシンガンの弾５０発×５

説明
小型ハンドガン・・・威力　低　連射　中　装弾数　１３発
主に護身用で女性向。従来のハンドガンよりかなり軽量。そのため威力が弱い
マシンピストル・・・威力　低　連射　高　装弾数　１００発
カ「う～ん・・・まぁまぁかな」

レ「アシュリー。念のためこれをもっていろ」
レオンはアシュリーに小型ハンドガン×5を渡した。
ア「うん」
アシュリーは小型ハンドガンをしまった。
10分後・・・
レ「よし。上に行くぞ」
レオンはフックショットを取り出した。
そしてフックがかかったことを確かめると上に上がった。
次アシュリー、カースが上がってきた。
そして扉を開けた。そこには、レオンがよく知る人物が2人立っていた。

タイラント（後書き）

次話、あいつらがちゃんと登場。

別れ

レオンの前には2つの人影があった。
「こんにちは、レオン」
「また、会ったな」
2人は親しげに話しかけてきた。
レ「エイダ、クラウザー」
と聞いた。
カ「知り合いか」
警戒し、銃をにぎっていたカースが聞いた。
レ「昔、ちょっとな」
レオンはナイフを抜いた。
レ「なにをしにきた。エイダ。クラウザー。それに、なぜ生きていた。
クラウザー」
ク「運がよかっただけだ」
エ「それより。それしまったら？」
エイダはナイフを、指差していった。
レ「目的は何だ」
ク「俺たちは、任務のためにここに着たのさ」
エ「そう。ちょっと私たちの組織から、裏切り者が出たの。
T－ウィルスとその新種を持ち出してね」
レ「なるほど。そいつの始末に来たって言うわけか」
レオンはナイフをしまった。
ク「確かにそうだが・・・あとひとつ任務がある」
クラウザーは後ろを向き言った。
ク「レオン達の・・・護衛だ」
エ「そっ、どういう気か知らないけど、そういうことだから、じゃあね」

というと、どこかに消えてしまった。
レ「まてっ！！・・・クソ」
レオンは先に行こうとした。
カ「ヴヴンッ！！」
カースが咳払いをした。
カ「誰か2人。忘れてないか？」
ア「そうよ。勝手に話を進めないでよ」
レオンは後ろを向いた。
レ「そうだった。すまなかったな」
カ「全く」
カースは、壁によっかかるのをやめると歩き出した。
その後ろにはアシュリーがいた。
レ「いこう」
3人は階段を上り始めた。その階段は鉄製だったため、足が触れるときの音が高く
不気味に聞こえた。
カ「さっき、あいつらはＴ－ウィルスの新種って言ってたよな。
どんな奴だ？」
レ「俺とアシュリーが出くわした、チェンソーと体が合体した奴がそれかもしれない。だが、詳しいことは、きっとこの先にある」
ア「そうよ。それを倒すのが、あなた達の仕事よ」
レ「そうだな。・・・・・ついたぞ」
その扉には、立ち入り禁止のマークが書かれていた。
カ「いかにも・・やばそうだな」
ア「そ・・・そうね」
レ「いくぞ」
レオンはその扉を開けた。
そのとき、すでになに者かの罠にはまっていた。

○

？「フフフフッ」
何者かは3人が映っている画面を見ながら、赤いスイッチを押した。
？「さぁ、なにを見せてくれる。ハハハハハ」

○

そしてレオンたちの頭上から巨大な鉄格子が降ってきた。
レ「よけろ！！」
ガシャーン・・・
高い音がして部屋の真ん中がふさがれてしまった。
カ「なにっ！！」
レオンは右、カースとアシュリーは左に分かれてしまった。
レオンはモバイルを取りだした。
レ「カース、それぞれ右、左にひとつの道がある。進むと8階の会議室に出る。そこで落ち合おう」
カ「あぁ。アシュリーは任せろ。それと・・・生きて会おう」
レ「あぁ」
そしてレオンとカース、アシュリーは別々の道へ向かった。

別れ（後書き）

次から2つのストーリーに変わります。
その後、また1つに戻ります。

レオン編

レオンは1人になってしまった。
1人のほうが歩きやすいかもな。そんなことを考えながら、
次のドアを開けた。
ドアの先は、広く、荷物がつんであった。ここは倉庫だろう。
もちろんここにもゾンビがいる。
ゾンビはうめき声を上げるとレオンのほうに向かってきた。
レ「雑魚が」
レオンはそうはき捨て、ショットガンを構えた。
レオンはショットガンの引き金を引いた。
ゾンビはショットガンの弾と散弾で全員が吹っ飛んだ。
すばやくレオンはブラックテイルにもちかえ、ゾンビの頭を撃った。
そこにいたゾンビは動かなくなった。
レ「ふん」
レオンは棚にあった、
ハンドガンの弾２０発
を拾いその部屋を後にした。
扉を開けるとそこは何もなく、ただ広い空間が広がっていて、奥に
扉があった。
レオンは走って近づこうとした。そのとき
「まて」
と声がした。その瞬間ドアの前に人が現れた。
レ「誰だ、貴様」
「ここは通さん。行きたかったら俺を倒していけ」
と謎の男は手袋を捨てた。
レ「どういうつもりだ。まぁいいお前を倒して先に行くぞ」
2人は同時に走り出した。
レオンは右腕を引きパンチした。しかしこれはあっさりよけられ、

謎の男は、レオンの腹に重いけりを食らわせた。
レ「くっ」
レオンはよろめいた。その男は攻撃をやめなかった。
レオンにパンチを食らわせ、両手を組み、背中におもっいっきり振り下ろした。
レ「グアッ」
レオンは床に倒れこんだ。
「その程度か」
レオンは立ち上がり後ろにスキップして間合いを広げた。
男が突っ込んできた。そしてパンチを放った。しかしレオンはこれをよけ、
男の後ろに回った。
「なにっ」
レオンは男の首を締め上げた。
「グッ・・・」
レ「お前らの目的は何だ」
「こたえ・・られない」
男は床をキックするとそのままバクテンをし、レオンの腕を払った
と同時に
後ろを取った。男はレオンの背中をけった。
レオンは吹っ飛ばされ床に転倒した。
レ「なかなかやるな。戦いのエキスパートか？」
男は答えず、回し蹴りを放った。その瞬間レオンは片方の足をけり、
バランスを崩させた。
レ「くらえっ！！」
レオンは男の腹に渾身のパワーでパンチを放った。
男は吹っ飛ばされ、床に倒れこんだ。
「くっ」
男は立ち上がり、口の血をふいた。
レ「意外とタフだな」

「そりゃどうも」
再び男は突っ込んできた。横によけたがわき腹をけられ横に吹っ飛ばされた。
腹の古傷が開いた。
レ「グッ・・・クソ」
「古傷が痛むのか」
レオンは腹部を押さえ立ち上がった。次の瞬間腕をつかまれ
男は壁のほうへ走った。そしてレオンを壁にぶつけ、腹をパンチした。
レ「ア・・・グッ・・・」
2発・・3発・・4発・・5発・・・
レオンは吐血した。
「オラオラどうした」
レ「ギっ・・・ガッ・・・」
レオンは床に倒れた。
「終わりだな。・・・死ね」
男はナイフを取り出し、レオンの心臓に振り下ろした。
ドンッ・・・
ナイフが刺さった・・・・と思ったが男は素手で殴っただけだった。
「なに」
ナイフはカランカランと音を立て床に落ちた。
ク「残念だったな」
「誰だ」
レ「ク・・・・クラウザー・・・・」
クラウザーはハンドガンを持ち、男を狙っていた。
ク「そこをどいてもらおうか」
そうクラウザーが男のナイフを撃ち落としていたのだ。
男は指示通り遠くに下がった。
ク「レオン。大丈夫か。一応お前を守るのが任務だ。行けここは俺が引き受ける」

レ「助かった・・・クラウザー。はぁはぁ」
レオンはよろよろ立ち上がり扉に向かった。
「誰が言っていいと？」
そのときクラウザーが男めがけて撃った。
男はよけた。
ク「俺だ」
「貴様、組織のものか」
ク「だからどうした」
「なら先に貴様を消してやる」
ク「望むところだ」
レオンは扉の向こうに姿を消した。

レオン編（後書き）

誤字・脱字があったらお教えください。

カース&アシュリー編

カ「アシュリー、君も銃を持つんだ」
ア「わかった」
2人は走っていた。渡り廊下の上だった。
カースは突然立ち止まった。
アシュリーはカースにぶつかってしまった。
ア「なに？」
カ「みてくれ、穴が開いている・・・下がれアシュリー！！」
アシュリーはびっくりしてしりもちをついてしまった。
なんと穴からゾンビが湧き出した。
カ「戦闘だ。構えて」
ア「うっ、うん」
アシュリーは銃を構えたが震えていた。
カ「怖がるな・・・行くぞ」
カースはハンドガンの引き金を引いた。ゾンビは血を出し、下に落ちていった。
カ「1体で終わりか」
カース達は穴を飛び越え進んだ。そして扉を開けた。
広い部屋に出た。そこはゾンビの大群がいた。
カ「マジかよ」
サブマシンガンを手にしたカースは、ゾンビどもを撃った。
アシュリーも撃つが当たらない。
カ「これだけゾンビがいんのに当たらないって・・・どういうセンスをしてるんだ」
ア「うるさいわね」
サブマシンガンは弾切れになった。カースはすばやくマガジンを取り替えた。
カ「こうなったら」

カースは懐から手榴弾を取り出した。
カ「いくぜ」
カースは棒を抜くとブン投げた。
カ「伏せろ！！」
アシュリーとカースは伏せた。数秒後、部屋は熱気と煙でいっぱいになった。
ア「ゴホッゴホ・・・」
カ「大丈夫か」
「ふ～ん、なかなかやるのね」
カ「誰だお前」
煙の中に人影があった。
「だれかしらね」
カ「アシュリー下がってろ」
アシュリーは走っていった。
カ「女を相手にする主義はないが、邪魔をするなら容赦はしない」
「きなさい」
カースはハンドガンを構えると横に走りながら引き金を引いた。
すると弾と弾がぶつかる音がした。
カ「うそだろ」
すべての弾は女が撃った弾によって粉砕されていた。
「弾がはっきり見えたもんでつい」
カ「どんな動体視力してやがんだ」
「こんどはこっちの番よ」
女は近くにあった箱から、ガトリングをとりだした。
カ「あれがもてるのか。女のくせに」
「女をバカにしないでよ」
女は容赦なくガトリングを撃ってきた。
カ「うわわわわ」
カースは走った。しかしカースは足を撃たれてしまった。
カ「クソッ」

ガトリングは弾切れになった。女はそれを捨てると、マシンピストルを取り出した。
カ「くっ」
カースは何とか立ち上がり走った。何とか走れた。カースはサブマシンガンを装備すると
引き金を引いた。
弾と弾が交差しぶつかり合う。そんななか
「知ってる？あたし接近戦でもいけるのよ」
というと女は突っ込んできた。女はけりを放ち、カースは壁にたたきつけられた。
カ「うわっ！！」
「あーら。こんなもん？」
そういうと女は距離をとりハンドガンを取り出した。
「さようなら」
女はハンドガンの引き金を引いた。弾がカースの胴体に直撃した。
カ「グアッ！！」
カースの体からは血が流れる。
「もっと、もっと、痛がる姿を見せてちょうだい」
カ「くっ・・・お前は変態野郎か」
女はハンドガンの引き金に指をかけた。
そのとき、銃声があたりに響いた。そして女の手からハンドガンがとんだ。
エ「まだまだ。ピンチじゃなさそうね」
カ「おまえはあのときの」
エ「エイダよ。お前じゃないわ。さぁ、早く行って」
カ「しかし・・・」
エ「いいからいって」
カ「・・・・・・・わかった」
そういうとアシュリーの元へいき、
カ「いくぞ」

とアシュリーの手を引っ張って先へ進んだ。
「あ〜あ。せっかくの殺人ショーが台無しになっちゃった。こんどはあなたを殺してあげる」
エ「やれるものならね」
カースは扉を抜けた。

クラウザー編

「よくも逃がしてくれたな」
ク「カッカすんな。俺が殺してやる」
クラウザーはナイフを抜き構えた。
「そんなナイフでなにが・・」
ク「ごちゃごちゃ言ってねぇで。さっさとかかって来い」
「・・・お前は必ず殺してやる」
男はクラウザーに向かってきた。そしてパンチを繰り出したが、
クラウザーの見事な体さばきでかわし、男の背中にナイフを突き刺した。
「ガッ！」
男の背中からは血が流れた。
「く・・・くそ」
男は下段足蹴りを放ってきた。しかしクラウザーはジャンプでよけ、
男の顔面にけりを食らわせた。
「ふー、ふー」
ク「どうした？息が荒いぞ」
といってクラウザーは来いという動きをした。
「バカにしやがって」
「ふふっはははははは」
ク「なにがおかしい」
「見せてやる。本当の姿を」
というと男は変形し始めた。
体は元の倍ぐらいにでかくなり、腹が破裂し中から、内臓、大腸、
小腸が飛び出し、
頭も破裂し首から触手が伸び、破裂した腹から顔が突き出していた。
手のひらからも触手がでていた。
ク「なんだこれは」

そいつは悪魔のような咆哮をあげた。
ク「新種のウィルスの効果か？」
そいつは手の触手をクラウザーのほうにたたきつけてきた。
ク「くそっ」
クラウザーはそれをよけ、サブマシンガンを取りだした。
ク「くらえ」
弾はそいつの体に当たっていた。しかし、まるで効いていなかった。
ク「化け物め」
そいつは体かどうかわからないところから酸を吐き出した。
クラウザーはそれをよけた。床は溶け出した。
ク「あれを食らったらひとたまりもないな」
クラウザーはサブマシンガンの標準を腹にあわせた。
そして撃った。するとそいつは苦しみだし、腹を閉じた。
ク「弱点はそこか」
そいつは触手を振りまわした。クラウザーは腕の触手はよけたが、
首の触手はよけきれず、食らってしまった。
ク「グアッ！！」
壁にたたきつけられた。
ク「次で最後だ」
クラウザーはそいつの腹が開いた瞬間、ピンを抜いた手榴弾を投げ込んだ。
そしてサブマシンガンを撃ち、腹を閉じさせた。そして、
手榴弾は腹の中で爆発し、肉片があたりに散らばった。
ク「終わったか」
クラウザーが去ろうとしたそのとき、そいつの肉片は動き、
待た１つになろうとしていた。
ク「おいおい。うそだろ」
そして合体は完了した。しかし何かが違った。
弱点の腹は開いておらずくっついていた。
ク「学習・・・したのか」

そいつは触手で攻撃してきた。クラウザーはすべてよけた・・・はずだった。
そいつの腹から新たな触手が出てクラウザーを締め付けた。
ク「グアッ！」
そして床にたたきつけられ、そいつは触手を振り下ろしてきた。
クラウザーは何回も、たたかれた。
ク「グッ・・・くそ」
クラウザーは何とか逃げだした。
ク「クソ・・・はぁはぁ」
ク「何度も再生するってことはまさか・・・」
クラウザーは辺りを見回した。すると、動く人影があった。
ク「そこだ！！」
クラウザーはサブマシンガンの銃口を向けると人影を撃った。
「うわっ！！」
そいつは落ちてきた。
ク「やはりお前だったか」
「なぜわかった」
ク「勘だ。・・・じゃぁな」
男に向かってサブマシンガンを撃った。男は血まみれになり動かなくなった。
同時に化け物も消えた。そしてクラウザーはレオンのあとをおった。

エイダ編

「さて、どうやって殺してあげようかしら」
エ「趣味が悪いわね」
「ふふっ、どうも」
先に動いたのはエイダだった。エイダは、ハンドガンを構え女のほうに走った。
エイダは引き金を引いた。女はそれをよけた。
エ「安心してると・・・」
といい、エイダは回し蹴りを食らわせた。
エ「痛い目にあうわよ」
「くそ」
女はけりを放った。しかしエイダはそれをとめた。女は、体を回転させ、
あいてるほうの足で攻撃してきた。エイダはしゃがみ、かわした。
「くっ、ちょこまかとうるさいハエだね」
エ「こっちがハエならあんたはうじ虫かしら？」
エイダは女の両足を持ち床に叩き落した。
「げほっ・・・」
エ「接近戦・・・お得意じゃなかった？」
エイダは女を蹴り飛ばした。
「ちっ」
女はハンドガン2丁を構え撃ってきた。
「死ね死ね死ねぇ～」
エ「バカな女・・・くすくす」
「なにがおかしい！！」
エ「足元を見れば？」
女の足元には、爆弾が5，6個置いてあった。
「なっ・・・ばかな」

エ「さようなら」
エイダはスイッチを押した。激しい爆音とともに、爆風、煙が。
エ「ふぅ、終わったわ」
女は跡形もなく消し飛んでいた。しかし代わりにそこにいたのは・・・
・
エ「タ・・・タイラント」
タイラントがそこにいた。エイダはハンドガンを構えた。
そしてタイラントはこちらをむき、向かってきた。
エ「くっ」
タイラントのパンチをエイダはかわし、近距離で射撃する。
しかし、タイラントに通じていなかった。
エ「ひとまず逃げるしかないわね」
エイダは、ボウガンを取り出すと、引き金を引いた。
火がついた矢が飛んでいく。そして、タイラントの体につき刺さった。
そして手榴弾を投げ込んだ。
エ「じゃあね」
手榴弾の爆発とともに、エイダは扉の向こうに消えた。

再会

いま、レオン、アシュリー、カースは階段を上っていた。再開を目指して。
レ「よし、ついた」
レオンの前には、カース、アシュリーがいた。
カ「レオン！！生きてたか！」
ア「レオン！！」
レ「あぁ、何とか生きて・・・」
ドサッ・・・
レオンは床に倒れた。
カ「レ・・・レオン、大丈夫か」
ア「ひとまず会議室に！！」
そういってレオンを会議室に連れていった。
レ「すまない。さっきのダメージが・・・大きかったようだ」
エ「せいぜい安静にすることね」
ク「情けない」
そこには、いつのまにか、エイダとクラウザーがたっていた。
しかし、2人はそれだけ言うと、去っていった。
カ「それにしても、ここも争ったあとがあるなぁ」
ア「そうね。・・・あそこに弾があるわ」
カ「俺も探すか」
カ「見つけたのは全部でこれだ」
ライフルの弾5発×3
レ「ライフル・・・誰か持ってるか」
全員が首を振った。
カ「一応持っておこう」
アシュリーは机のほうを見た。
ア「ねぇ、これみて」

そこには書置きがあった。
～この大参事の後から来た者たちにこれを残す。
あの第３の組織からきたという男は狂っている。
・初日、研究員を人体実験させ、体を爆発させた。
・２日目、ゾンビの実力を測るため、研究所内にゾンビを放つ
・３日目、研究者は私を残してみな死んだ。
あの新ウィルスは、恐ろしすぎる。みんな新ウィルスのゾンビに殺された。
逃げる道はただ１つ。この研究所には屋上に航空機がある。
それに乗ることだ。しかし、この建物は３０階ここは８階。
途中にはあいつらがいる。困難なことだが、がんばって生き延びてくれ～
カ「上等だ。いってやろうじゃねぇか」
ア「あいつらって何なんだろ」
レ「いくしかないだろ。もう後戻りはできない」
レオンはたちあがった。
カ「お、おい、もういいのか」
レ「こんなとこでとまっている場合じゃない。いくぞ」
レオンたちは奥にある階段を上った。
カースは扉を開け中に入った。
カ「何もいないな」
とカースは足を踏み入れた。しかし、そこは足を踏み入れてはならない、
奴の縄張りだった。
カースは真ん中に立つと背伸びをした。そのとき
カースはいきなり吹っ飛ばされた。
カ「うわっ！！」
机にあたり書類がばらばらに落ちてきた。
レ「カース！！・・・なにが起こった」
カ「いきなり殴られた！！」

レオンも部屋に入った。
ゴッ！！
レオンも同じように吹っ飛ばされた。
レ「グアッ！！」
レオンはダンボールに頭から突っ込んだ。
レ「アシュリー！！この部屋に入るな！！そこにいろ！」
ア「う、うん」
カ「見えない敵・・・か」
レオンは、マシンピストルを構えた。
カースはキラー7を構えた。
そのときレオンとカースは同じほうに吹っ飛ばされた。
レ「くっ・・・しかしわかったことは、敵は1匹だ」
カ「全く見えないな」
カースはまた吹っ飛ばされた。
カ「どこに居やがる。出て来い」
レ「待てカース！！・・・音だ。音に集中しろ」
カ「音？」
そういってカースは目を閉じた。
カサッ・・ズズズ・・・ベチャ・・・
そこだ！！カースは心の中で叫び、キラー7でそいつを撃った。
ヴ・・・ドサッ
カ「なんだ、こいつ。全くよえぇじゃねぇか」
レ「死んだら姿が見えるもんなのか」
そいつは腹やら何やらいろんなとこからいろんなものが飛び出していた。
レ「ここに用はない。行くぞ、アシュリー」
ア「うん」
そこにはエレベーターが在った。怪しいとは全員が思ったが
乗るしか上に行く方法がないので仕方なく乗ることにした。
ウィィィ・・・ン・・・ガタガタガタ・・・プーー・・・ン

またゆれて・・・止まった。
カ「みんな・・・来るぞ！！」

襲撃

狭いエレベーターの中では、レオンは、マグナム、カースはキラー7を構えていた。
ズガン！・・・ガンガンガン！！・・・
エレベーターの天井ガどんどんへこんでいく。そしてついに穴が開いた。
カ「端によれ！！」
レオンたちはエレベーターの壁に張り付き、真ん中を空けた。
そして、長い触手がエレベーターの上から入り、床を貫いた。
ア「キャアアアアアア！！！」
アシュリーは叫んでしまった。それを聞きつけ、触手はアシュリーのほうに迫っていった。
レ「チィッ！！」
レオンは触手を3発撃った。触手は血を流し、引っ込んでいった。
次の瞬間、エレベーターはものすごい速さで下に落ちていった。
カ「ウワァァァァ」
ア「キャアアアアアア」
レ「クッ！！」
そして、エレベーターに乗った部屋が見えた。
レ「飛び込め！！」
レオンたちは勢いよく部屋に飛び込んだ。
カ「一体なんだってんだ」
レオンは立ち上がりエレベーターに近寄った。そしてレオンはエレベーターの上を指差した。
レ「どうやら、ロープを切られたらしい。かなりの切れ味だな。あの触手は」
カ「これからどうする？別の道があるのか？」
レオンはモバイルを取り出した。そしてしばらくして

レ「1つある。会議室の中に隠し階段があるらしい。場所はかかれてない」
カ「探すか」
レオンたちは会議室の中を物色しはじめた。
・・・・数分後・・・・
カ「おい。これみてくれ」
カースは絵の入っている額縁を取り外した。中には、電子ロックがかかった金庫が入っていた。
レ「なるほど。数字を入れればいいのか」
レオンは何かを取り出し、金庫に取り付けた。
ピーーーーーー・・・・ガチャン！！
レ「あいたぞ」
カ「そんなもの持ってたのか」
と言いつつカースは金庫を開けた。するとまだ奥に何かがあった。
カ「今度は鍵だぜ。しつこいな」
カースはポケットから針金を取り出し、鍵穴にはめた。
カ「フンフンフフ～ン。～♪」
カチャリ・・・
カ「あいたぞ」
カースは鍵を開け、中を見た。そこには、スイッチがあった。
カ「おすぞ」
カースはそれを押した。すると壁の一部が崩れ、隠し階段が現れた。
レ「行くぞ」
レオンたちは隠し階段を下りた。途中で隠し階段の入り口に鉄格子が降りる音がしたが、
別に気にも留めなかった。
レ「ここを抜けると4階だ。そこから階段を使う」
カ「おい見ろよ」
カースは、窓の外を見て言った。
カ「あいつ、特殊部隊だ」

そのあいつは、サブマシンガンを構え、あたりを警戒していた。そいつは、
いきなり何かを叫ぶと、サブマシンガンで何かを撃った。
レ「なにと戦ってる？」
次の瞬間そいつは、触手によって心臓を貫かれ、動かなくなってしまった。
カ「し・・・死んだ」
そいつを殺したと思われる化け物が、そいつの死体に近ずき、レオンたちのほうを向いた。
そして、走っていった。
カ「早く行くぞ！！気づかれた。こっちにくるぞ」
レオンたちは走った。そしてドアを開け、辺りを見回した。
レ「急いだほうがいい」
レオンたちは、5階に続く階段を上った。そして、6階、7階と上っていった。
そして、ドゴォォォォン・・・と言う壁の崩壊の音がしたから聞こえた。
カ「あいつが来たぞ」
レオンたちは、走った。そして、8，9まで上った。
レ「9階に着いた」
すると、エレベーターの扉がどんどんふくらみ、触手が出てきた。
カ「エレベーターの紐を伝ってきやがった」
レ「やるぞ」
レオンとカースは、サブマシンガンを構えた。
化け物は姿を現した。そいつは人だった。ただおかしいのは、背中、手から
触手が飛び出ていることだった。
カ「近くで見たらもっと気持ちわりぃな」
レ「アシュリー、隠れろ」
アシュリーは物陰に隠れた。化け物は咆哮を上げた。腹に響くいや

な咆哮だった。

決着

カ「いくぞっ！！」
サブマシンガンで化け物を撃った。レオンも続いた。化け物は後ろに吹っ飛ばされた。
レオンは、マガジンをすて、新しいのを入れた。カースも、弾切れになったみたいで、
マガジンを取り替えていた。
カ「一気にたたみかけるぞ」
カースは、右手にサブマシンガン、左手にマシンピストルを持ち、引き金を引いた。
マシンガン系は、すぐに弾がなくなってしまう。
カースは、どちらも弾切れになった。
カ「チッ！！」
マガジンを抜いたそのとき、煙で見えなくなっているほうから、触手が伸びてきた。
そして、油断していたカースの体に突き刺さった。
カ「グアッ！！」
レ「カース！！」
レオンはナイフを構えると、触手にたたきつけた。きられた触手は鮮血を撒き散らし、
引っ込んでいった。
カ「助かった・・・グフッ！！」
カースの口からは血が出ていた。そしてカースは腹に突き刺さっている触手を強引に
抜いた。そして、カースの周りには血が飛び散り、腹からは血があふれ出していた。
カ「これぐらいで死にはしない」
カースはよろよろと立ち上がった。同時に化け物も立ち上がった。

化け物は触手を鞭のようにしならせ、レオンをたたきつけた。
しかし、たたきつけたのは床で、レオンは、横に回避した。
またレオンは、ナイフで触手を切り落とした。
レ「ずいぶん弱い触手だな」
レオンはショットガンを構え、引き金を引いた。
ショットガンの弾と散弾は、化け物の体に穴を開けた。しかし、化け物は
瞬時に回復した。
カ「再生能力・・・か」
カースは威力の強いキラー7を化け物の頭に向けて発射した。化け物はよろめいた。
しかし、カースも撃った反動で、指された箇所から、血があふれ出した。
レオンもマグナムを使うが、あまり効果がない。化け物は体制を整え、レオンのほうに向かってきた。化け物はある程度近づくと、すべての触手をレオンのほうに発射した。
レ「クッ！！」
レオンは飛び込み前転をしてかわした。化け物は、やけになり、触手を振り回している。
すかさずレオンは、触手攻撃をかいくぐり、化け物にまわし蹴りを食らわせ、
ふっとばした。傷の痛みが落ち着いたカースも参戦してきた。
カ「いくぜ！！」
カースは化け物の頭を狙って、サブマシンガンを発射した。
化け物は顔を抑え、転倒した。そしてしばらく痙攣した後、動かなくなった。
カ「お・・・終わった」
レオンはカースの下にちかづいた。
レ「大丈夫か、カース」
アシュリーも近づいてきた。

ア「ちょっと休もうよ」
そこで3人は、すこし休むことにした。

開始

レオンたちは、延々と続く階段を上っていた。
カ「なぁ・・・あの化けもん。ほんとに死んだのか」
レ「さぁな」
ア「急ぎましょ。もうこんなとこうんざりよ」
カースの予感は的中した。いまさっきの部屋では、あの化け物が、動き始めていた。
レオンたちは今、１２階にいた。ここら辺は、階段続きなので、階段で屋上に向かっていた。
その途中、風が抜ける音が聞こえた。
ア「ねえ、、、あれみて」
階段は、レオンたちがいるところを境に、階段がなくなっていた。
しかも、そこにはちょうどよくドアが在った。
カ「いくらなんでも・・・怪しすぎるだろ」
ア「この部屋に入れ・・・って言ってる気がする」
レオンは扉を開けた。やはり、何かがいた。
「まっていたよ」
レ「だれだ」
「秘密だ。それより君達に、新製品を試してもらいたくてね」
エ「そこまでよ。裏切り者」
エイダとクラウザーが上から現れた。２人ともそいつに銃口を向けている。
「来ましたか」
男は両手を挙げた。
ク「死んでもらうぞ」
「それは無理な相談です。さようなら」
男は、突如消えた・・・・じゃなくて、下に落ちていった。
ク「ちっ、隠しエレベーターか」

エ「追うわよ」
といって、隠しエレベーターに近づいた。
レ「エイダ！！」
エ「心配しないで。私は奴を追いかける。あなた達は、それお願いね」
カースはエイダが向いていたほうを向いた。そこにはゾンビが２匹歩いていた。
エイダとクラウザーは闇に消えた。
レ「こいつらを始末してエイダを追うぞ」
レオンは、ブラックテイルを抜き、撃った。弾は、ゾンビの頭に命中した。
カースは違うほうのゾンビを、キラー７で撃った。何発か撃ち続け、動かなくなった。２体は床に倒れ、その後、なぜか飛び散った。
カ「なぁ、もしこいつらが新製品だとしたら・・・」
その言葉は後の出来事に消された。
ゾンビ共が立ち上がったのだ。いやそれどころか、数が、２体から、十数体に増えていた。
カ「なんだぁ！！こいつら」
カースは腕を撃った。ゾンビの腕が吹き飛ぶ。次の瞬間、腕は形をかえ、
ゾンビの姿になっていた。
レ「面白い能力だな」
レ「いったん逃げるぞ」レオン達は、隠しエレベーターがあった穴に飛び込んだ。
ア「キャァァァァァァ！！！」
レオンは背中のところをカチカチと何かをしていた。
カ「着地はどうする？」
レ「こうする」
そういった瞬間、レオンの背中から、パラシュートが開いた。
そして、レオンとカースをつかんだ。

カ「用意良いなぁ」
レオンたちは、ゆっくりと着地した。レオンは2人を離し、パラシュートをはずし、
投げ捨てた。その後、アシュリーは何気なく、上を見た。
その瞬間アシュリーは固まった。カースも異変に気づき、上を見上げた。
カ「レオン！！逃げるぞ」
レオンも上を見た。すると、さっきのゾンビたちが、上から降って来ていた。
レオンたちはそこを出ると、エレベーターの戸を無理やり閉めた。
カ「ウオオオオオ！！！」
バターン・・・・扉は閉められ、あかないように、金属の棒その他いろいろをつけ、
あかないようにした。
レ「いくぞ」
レオンたちは走り、エイダたちと合流した。
レ「無事だったか」
カ「あの男は？」
ク「屋上だ」
カ「早く行こうぜ」
そのとき、エレベーターが来た。
カ「あっ・・・エレベーター・・・あっそう」
そして全員エレベーターに乗り込んだ。途中、何事もなく、屋上にたどり着くことができた。
「待ちくたびれたよ」
そこに、男と、脱出用飛行機があった。
「この飛行機をめぐって、戦おうよ」
レ「なに」
エイダとクラウザーは黙っていた。
「僕達が勝ったら、この飛行機で僕達は逃げる。君達が勝ったら、

君達が乗る。
これでどうだい？」
カ「なにがしたい」
「ゲームだよ」
ク「いかれやろうが」
エ「いいわよ」
「まって、今来るはずだから」
次の瞬間、レオンと、カースが戦った、化け物と、エイダ、クラウザー、レオン、アシュリー
がよく知る人物、タイラントが現れた。
レ「サドラー」
ク「なぜ生きている」
サドラーと呼ばれた男は口を開いた。
サ「よくも、私の教団をつぶしてくれたな。ケネディ」
レ「また、お前を倒させてもらうぞ」
そして、男が口を開いた。
「これで４とおまけ１人対４になった。バトル開始は５秒後だ」
そして５秒がたった。
「開始」
それを聞くと、みんないっせいに動き出した。
レオンＶＳサドラー
カースＶＳ触手ゾンビ
エイダＶＳ裏切り者の男
クラウザーＶＳタイラント
アシュリー　逃げ隠れ
で戦いは始まった。

レオン編

レオンたちは、屋上のすみに場所を変えていた。
レ「なぜ生きていたんだ」
サ「こいつのおかげさ」
そういって、サドラー脳では形を変え、触手に変化した。
レ「まだその体に寄生虫が健在か」
サドラーは、触手をレオンにたたきつけた。レオンは、それを回避し、
マグナムの引き金を引いた。しかし、たいしたダメージはなかった。
そして、サドラーは、レオンとの間合いをつめ、触手でなぎ払った。
レオンは、バック転でよけた。
サ「意外とやるようだな」
レオンは、答えず、サブマシンガンにもちかえた。しかし、サドラーは撃たせる暇を与えなかった。サドラーは、身体を右にひねって身構え、触手を、レオンのほうに長く伸ばした。
しかし、レオンは、それをよけた。
レ「隙がありすぎだ」
サ「そうかな？」
サドラーは、左手も触手に変え、床に打ち込み、レオンの足元に突き出した。
レオンに直撃し、レオンは、後ろに倒れた。
レ「油断した」
レオンは立ち上がり、サブマシンガンの引き金を引いた。
サ「無駄だ」
サドラーは、触手を手に戻し、弾をすべて受け止めた。
レ「寄生虫の力か」
サドラーは、不適に笑うと、レオンめがけて投げた。
それは、まっすぐに早く飛んでいった。

レオンは、横に転がり、回避した。そのとき、
サドラーが、目の前に来ていた。
レ「なっ」
サドラーは、体を左にひねって、身構え、左手で、掌底を繰り出した。
レオンは、遠くへ吹き飛ばされた。
レ「ガッ！！」
レオンは、床に、たたきつけられた。そして、サドラーはレオンのもとに遠距離から
高速移動で近づき、右手でレオンの頭をつかみ、床にたたきつけた。
レ「・・・・・・！！」
レオンは激痛で声も出なかった。幸い大事には至らなかった。
サ「さぁ、早く起き上がれ」
レオンは、近くにあったフェンスに寄りかかり、立ち上がった。
レ「はぁ・・・はぁ・・・さ・・・サドラー
お前の口の・・・中でも見させてもらおうか」
というと、レオンは、マグナムをサドラーの口めがけて撃った。
サドラーは口を押さえ、のけぞった。
サドラーは口の手をどかし、口を開いた。
サ「クソっ！！」
サドラーの口は、目玉をのぞかせていた。
サドラーは、手を触手にかえレオンをつかんだ。
サ「死ね！！」
しかし、レオンは、ナイフで、サドラーの触手を刺した。
サドラーはレオンを放した。
その隙に、レオンはサドラーの近くに行くと、開いている口のなかのめだまを
ナイフで突き刺した。
サ「ぐぁあああああ！！！」
サドラーの口からは、茶色い液体が噴き出していた。

レ「サドラー。あの姿にはならないのか」
サ「クソガァ！！」
サドラーは両手を触手に変えると、振り回した。
レ「なるほど、もう変身できないのか。哀れだな」
レオンは、サドラーの口めがけてナイフを投げた。
サドラーは、ナイフを払った。しかし
レ「終わりだ。サドラー」
レオンの肩にはロケットランチャー（特殊弾）が乗っていた。
レオンは、引き金を引いた。同時に、レオンのまわりに煙が舞い上がった。
近づいてくる、弾を見て、
サ「私が・・・こんなとこで・・・」
弾は、サドラーを直撃した。そして、サドラーの体は爆発。今度こそ完全に死んだ。
レ「前と変わらない倒され方か。学習したらどうだサドラー」
と、レオンは誰もいないとこに言うのであった。

カース編

カ「クソッ！！こいつしつこいぞ」
カースは走っていた。後ろには化け物。
カースは、行き止まりになり、とまった。化け物もとまり、カースは振り向いた。
そして振り向きざまに、サブマシンガンに引き金を引いた。
化け物の体には何百発もの弾丸が直撃した。
化け物はよろけたが、すぐ回復してしまった。カースはタンクが載ってる台の裏に隠れ、
マガジンを変えた。そして、また飛び出し、化け物に撃とうとした。
ところが、化け物は触手を伸ばし、カースの手からサブマシンガンを奪った。
カ「あっ！！・・・・ドロボー！！・・・・」
そういってる間に化け物と、サブマシンガンは、同化し、銃口をこちらに向けた。
カ「・・・って言ってる暇ないか」
サブマシンガンは、火を吹いた。カースを弾丸の嵐が襲う。しかし、カースは、全力疾走して
建物に近づいたの後、スライディングをして隠れた。
まもなく、サブマシンガンは、弾切れになり、化け物はサブマシンガンをすてた。
カースは拾いにいこうと走った。そのとき
化け物が、走りこちらに向かってきた。
カ「うおおおおおおお！！」
とカースは走った。化け物もついてくる。
カ「おおおおお・・・と見せかけておりゃー！！」
とカースは後ろに向きを変え、後ろにいた化け物にライ〇ーキックを食らわせた。

化け物は後ろにふっとんだ。その隙に、サブマシンガンを拾い、マガジンをつめた。
カ「力だけじゃお前に勝てないなら、頭を使う！！」
そのとき隠れていたアシュリーは思った。
さっきのって・・・頭使ったの？やけくそじゃないの？
と。
化け物は起き上がり、触手で、カースの頭を殴った。
カ「いててててて！！」
カースは床にしりもちをついた。すぐ立ち上がり、カースは何かを取り出した。
カ「食らえ！！」
カースは何かを投げた。そして、あたりにまぶしい光がほとばしる。
閃光手榴弾だ。
化け物は光を直視してしまったため、目？をおさえていた。
そして、カースは化け物の背後から、サブマシンガンを撃った。
化け物は倒れた。
カ「おっ、１番のダメージじゃん。弱点はそこか？」
と背中めがけてサブマシンガンを撃ちまくる。
化け物の傷は回復しなかった。そして、まだ化け物が、よろついている間に、
フェンスに向かって撃った。そして、カースは、けりを入れ、フェンスは、壊れた。
カ「よし。あとは」
化け物は視力を取り戻し、こちらに向かってきた。
すばやく、カースはよけると、カースは、何かを、化け物の背中に５つほど付けた。
そしてカースは化け物にけりをいれ、さっきのフェンスから、化け物を落とした。
化け物は、まっさかさまに転落し、地面にぶつかった。
カ「これぐらいで死なないよな」

カースの言葉通り、化け物は起き上がった。
カ「でもこれで終わりだ」
カースは手に持っていた、装置のボタンを押した。
化け物の背中に仕掛けてあった何かが赤く点滅する。その後
建物の下から、大きい爆音が響いた。
カ「これが頭を使う作戦だ」
ア「だから頭使ってるのそれ？」
アシュリーは、つっこんだ。

クラウザー編

タイラントは、何の前触れもなく、突っ込んできた。
ク「芸がない奴だ」
クラウザーは、タイラントの突撃をよけ、サブマシンガンを、タイラントの頭部に撃ち込む。
タイラントは、右腕で、なぎ払ってきた。しかし、クラウザーは、後ろに転がり回避した。
カチッカチ・・・
ク「弾切れか」
すかさずタイラントは、パンチを繰り出した。クラウザーは、マガジンをタイラントに投げ、
あて、新しいマガジンを入れた。
タイラントは、右腕でクラウザーの腹部に、パンチを入れようとした。これは、
クラウザーが横に動き、よけた。次の瞬間、タイラントの左腕が、クラウザーの首をつかみ
持ち上げた。
ク「かっ・・・・」
クラウザーはタイラントに数発けりを入れるが、効いていない。
そこで、サブマシンガンを、タイラントの頭部に密着させ、撃った。
タイラントは、よろつき、クラウザーを放した。
ク「まだしなねぇのか」
次の瞬間、クラウザーは頭を殴られ、吹っ飛んだ。
ク「へっ」
クラウザーは、サブマシンガンをまた、タイラントの頭部にくっつけ、引き金を引いた。
再度、タイラントはよろける。そして、クラウザーは、ナイフを抜くと、

タイラントの首を、斬った。クラウザーは、何度も何度も斬っていく。
タイラントは、走って逃げた。そして、屋上のフェンスを乗り越えた。
クラウザーが、下を見ると、タイラントはいなくなっていた。
ク「逃げやがって」
そう言うと、クラウザーは、エイダのところに向かった。

エイダ編

重々しい空気の中、最初に口を開いたのは、エイダだった。
エ「目的は何かしら」
「夢があったのさ・・・この世界を手に入れたいって言う夢がね」
男は、フェンスに座っている。少しでもバランスを崩せば、まっさかさまに落ち、
命はない。
エ「なぜ、ラクーンに来のかしら。教えてほしいわね」
「ボクは、ここの生まれさ。両親も、みんないた。そこにアンブレラが現れ、この町を変えた。
みんな死んでしまったが僕だけが生き残った。そのアンブレラに復讐したかったのさ。
そこで、懐かしいここを拠点に選んだというわけさ」
エ「おかしな回答ね」
「こんなただのゲームに、付き合ってくれた君たちに感謝するよ」
エ「どういたしまして」
エイダは、ブラックテイルを抜き、引き金を引いた。
男は、フェンスから降り、よけた。
「危ない危ない」
男は、手を上げた。そして、エイダが瞬きをした瞬間、エイダの視界から、
男が消えていた。
エ「なっ」
エイダは、背中をけられ、フェンスにたたきつけられた。
「隙がありすぎですよ」
エイダは立ち上がり、
エ「あなた、いつから鍛えられていたの？」
「気づきましたか。私は、ラクーンで生まれ、生後まもなくして、

軍の施設に入れられ
２０年間戦闘の訓練をおこなって来ました」
エイダは、ブラックテイルを男に向け、発射した。
しかしこれもよけられた。その隙にエイダは、男に近づくと、けりを放った。これも手で止められた。しかし、エイダには、次の手段があった。
エイダは、近距離で、ブラックテイルの引き金を引いた。
ところが、男は、ジャンプし、さかさまの状態になった。そして、のこっている方の手で
エイダを殴った。
エ「なかなかやるわね」
「それはどうも」
エイダは、男と距離をとり、ボウガンを構えた。
「あまり強そうではありませんね」
男は、地をけって間合いをつめた。エイダは、けられ、吹っ飛ばされた。
「終わりですよ」
男は、銃を取り出すと、エイダに向けた。
エ「くっ」
エイダは目をつぶった。次に瞬間まばゆい光が辺りを包んだ。
「ま・・・まぶしい！！」
エイダは、目をつぶっていたおかげで、大丈夫だった。
エ「形勢逆転ね」
男は目を開けることができず、目を押さえていた。エイダは、ブラックテイルを取り出すと、
男の心臓めがけて数発撃った。
「・・・・・・！！」
男は、床に倒れた。
「私はもう・・・・眠ることにしましょう」
男は、完全に死んだようだ。男の周りは血の海になっていた。

さっきの光は、カースの使った閃光手榴弾のようだ。
エ「助けられたわね」
エイダは、歩き出した。

エイダ編（後書き）

ついに最終話です。

最終話

これで４対０。レオンたちの勝利である。全員疲れきっており、誰も口を開かなかった。
そこに、アシュリーが出てきた。
ア「みんな勝ったよ」
とアシュリーは喜んでいた。そんな中、レオンが口を開いた。
レ「新種は、入手したのか」
ク「いや、この町は、俺達が連絡して、４分後、核が落とされる。ウィルスも完全に消し去るって言うわけだ」
カースはやれやれという顔をして、
カ「乱暴だな。いつ連絡するんだ？」
エ「あなた達が行った後よ」
レ「お前達は別・・・ってわけか」
と、レオンは立ち上がった。それに続き、みんな立ち上がった。
カ「誰か操縦できるのか？」
レ「俺ができる。一応訓練をつんだからな」
とレオンは、操縦席に座った。
レ「行くぞ」
と、レオンがせかしたので、みんな急いで飛び乗った。
レ「また、会おう」
レオンは、ヘリの戸を閉めると、操縦桿を握った。そして、ヘリは飛び立った。
ク「寂しいんじゃないのか」
エ「さぁね。それより、早く連絡したらどう？」
ク「あぁ」
そして、エイダとクラウザーは、ヘリに迎えに来てもらいラクーンを去った。
そして一夜が明けた。

レオン、カース、アシュリーは無事アメリカに着き、迎えられた。
大統領は、娘が帰ってきたのが一番うれしかったようだ。
その後、レオンはまた任務で、アメリカを去っていった。
カースは、今回の戦闘結果、アシュリー護衛、生き残りということで
レオンとおなじとこに入ったらしい。
アシュリーは、楽しい毎日を送っているらしい。ただ、少しトラウ
マになったせいか、
以来ラクーンということはなかったという。
ニュースでは、ラクーン謎の爆発とか、再び焼け野原にとかひっき
りなしに
報道していた。そのあとは、もう報道されなくなったけど・・・
一ヵ月後ぐらいにレオンはテレビに出た。
なんでも、某国の偉い人を誘拐犯から取り返し、その誘拐グループ
をつぶしたらしい。
そこには、カースもいた。二人はうまくやっているらしい。
一方エイダたちは・・・・・
一人の男が、大型ディスプレイをみていた。
そこに二人の男女が入ってきた。
エ「ウェスカー、今回の報告及び新種ウィルスのサンプルです」
ウ「今回は、レオンとうまくやれたみたいだな」
ク「では、これで」
二人は、部屋を後にした。
ウ「あと少しだ。アンブレラの復興は目前だ」
そしてウェスカーは不適に笑った。

最終話（後書き）

呼んでくれた皆様。本当にありがとうございました。
まだまだ文章はへたくそですが、これからもがんばりたいと思います。こうしたほうがもっとよくなるなど
ありましたら、連絡をください。さようなら。

おまけ

カースたち6人は特殊部隊としてラクーンに派遣され、今ラクーンにたどり着いたとこだった。
カ「いいか、みんな。油断するなよ」
皆は、無言でうなづいた。
「うわーーーーッ！！」
一人の隊員が声を上げ、サブマシンガンの音が聞こえてくる。
カ「どうした！！」
あたりは暗く見えなかった。
「わかりません。何かがいます！！」
カースは、ライトをつけた。
カ「なんだ・・・・これは」
あたりには、異様な人間がこちらに向かってきた。
カ「化け物め」
カースは、サブマシンガンの引き金を引いた。
一体また一体と倒れていく。が、平然と起き上がり、こちらに向かってくる。
カ「逃げ道を作れ！！いったん引くぞ」
みんなは、逃げ道を作るため、一緒の方向に弾を撃った。
しばらくして、ゾンビはみんないなくなり、辺りには、ゾンビの肉片が転がっていた。
カ「行くぞ」
向かった先は、何もいなかった。このときまでは。
カースは無線を取り出し、
カ「こちらカース・・・こちらカース、応答願います」
というが、返ってきた答えはザーーーーっという音だけだった。
カ「くそっ」
そのとき、

「や・・・やめろ・・・くるな・・・うわぁぁぁぁぁ！！！」
という声が聞こえた。
カ「なにがあった！！」
とカースはサブマシンガンを取り出し、ライトをつけた。
そこには、首から先がない隊員の無残な死体が転がっていた。
カ「なんど・・・これ」
次の瞬間おぞましい獣の咆哮が聞こえた。隊員はみな声が聞こえるほうを向いた。
そこには、頭が二つ、ある生物が立っていた。
カ「いぬ・・・・か？」
そいつは、隊員の一人に飛び掛った。隊員はそれをよけ、サブマシンガンを撃つ。
が、恐怖のあまり、当たらない。
しばらくして、その隊員は声を上げ逃げ出した。
カ「お・・・おい待て！！」
その隊員はもう見えなくなっていた。聞こえるのは、サブマシンガンが奏でる音だけ。
その犬は、傷を負ったのか、逃げていった。
一人の隊員が声をかけてきた。
「隊長もう我慢できません。俺は、帰らせてもらいます」
といい、。去っていった。
カ「まてっ・・・危険だぞ！！」
といったがもう聞こえてないようだ。そのあと、隊員はみんなどこかへ行ってしまい、
カース一人になった。
カ「勝手にしやがれ！！」
カースは声を荒げると、一人で歩いていった。
途中ゾンビにあったが、倒し進んでいった。しばらく歩くと、
ひびが割れた地面があった。カースは戸惑ったが、進むことにした。
カ「落ちないように」

とねがったが、その通りにはいかず、落ちてしまった。
カ「おわーーーー！！」
カースが落ちた先は、暗い何かだった。カースはサブマシンガンを構え、ライトをつけた。
そこはトンネルのようだ。
カ「ここはゾンビはいないのか」
カースは、奥へ奥へと進んでいったが、出口に着かない。
カ「いつになったらつくんだ」
と叫んでいたが、また歩くと、叫ぶ元気がなくなったらしく、しゃべらなくなった。
カ「もう・・・だめだ」
といい座り込んでしまった。
カ「はぁはぁ、運が悪いとこに落ちてしまったなぁ」
そうして、数分後、トンネルの奥のほうに、ちらっと明かりが見えた。
救助だ。助かった。
カースは声を振り絞り叫んだ。
カ「おーい、助けてくれー！！」
こうして、物語は始まったのであった。

おまけ（後書き）

おまけデース。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2582c/

バイオ・ハザード

2010年10月14日12時02分発行